

SONRISA

そんりさ

Vol.147



サパティスタ蜂起20年

サパティスタ支持基盤集落「ミゲル・イダルゴ」の創設者の1人セルヒオさん=2014年1月ミゲル・イダルゴにて（柴田大輔さん撮影）

「そんりさ」「微笑み」を意味します。様々な活動を通じて、中南米の人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- 02 サパティスタ武装蜂起20年 …… 柴田大輔
- 06 サパティスタは先住民25万人を統治 ……ラウラ・カステジャ
- 09 麻薬密輸組織、鉄鉱石を中国に輸出 ……翻訳ワークショップ
- 11 コーヒー物語1「カフェインディオとの出会い」… 高木三四郎
- 14 ラ米百景「ラ米に恋した半世紀」 ……伊高浩昭
- 15 グアダラハラブックフェアと公立図書館 ……鋤柄史子
- 16 音楽三昧♪「『コンドルは飛んでいく』の百年」 ……水口良樹
- 18 メキシコ食巡り「トウモロコシスープ」 ……ミゲル・アクーニャ
- 19 ニュースクリップ ……サザエ

2013年2月8日 日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM) 発行

サパティスタ武装蜂起から20年 自治の現在

写真・文 柴田大輔

メキシコ南東部のチアパス州で1月1日、サパティスタ民族解放軍（EZLN）が1994年の武装蜂起から20年周年を迎えた。NAFTA（北米自由貿易協定）を「貧しい農民にとって死刑宣告」とし、協定発行と同日の武装蜂起は、世界に対し大きな問題を提起した。

彼らが武力を行使したのは94年1月だけであり、その後は主体となる農民・先住民族による自治をチアパス州内の自治区で進めている。昨年12月、自治区で開かれた「サパティスタ学校」に参加し、自治集落を訪ねた。一昨年12月から昨年1月にかけて訪ねた他の集落と合わせ、現在の自治活動の様子を報告したい。

1. 歴史

チアパス州東部に、サパティスタの活動拠点ラカンドン密林が広がる。昨年12月24日から27日にかけて開かれた「サパティスタ学校」を通じ私が訪ねたサパティスタ支持基盤集落「ミゲル・イダルゴ」はここにある。

サパティスタ学校は、昨年8月に続いて12月が2回目となり、国内外から市民活動家、学生、旅行者や他地域の先住民族ら事前にネットで登録を済ませた2000人以上が参加した。チアパス州内に5ヶ所ある自治拠点「カラコル」に参加者は配属され、滞在先となる各集落に振り分けられた。私は第1カラコル、ラ・レアリダーから80人の参加者とともにミゲル・イダルゴに向かった。

集落では、参加者1人に教師役となる1人の住民が割り当てられ各家庭にホームステイする。3日間の滞在中、寝食を共にし、仕事、日常生活を通じて自治活動を体験する。それが「学校」だ。

私の担当は、私より1つ年上の34歳の男性ホルへ。気さくで同世代ということもあり、気兼ねなく話すことができた。質問を繰り返しても「聞いてくれることが嬉しい」と嫌な顔せずと答えてくれた。

ミゲル・イダルゴには先住民族であるツェルトル民族100家族程が暮らし、その内の2家族を除いた全



武装蜂起から20周年を迎えるサパティスタ
＝2014年1月1日、ラ・レアリダーにて

てがサパティスタ派の住民だ。広々とした空間に碁盤の目に路地が走る。集落全体を覆う芝に似た植物が、強い日差しを受けて鮮やかに輝いていた。

ホルへの祖父で、集落創設者の一人であるセルヒオさん（83）に、これまでの歴史を聞いた。

セルヒオさんは1930年、チアパス州アルタミラノ市近郊の農場「サン・マルティン」で働く労働者の子として生まれた。労働者は日曜を除く週6日間、朝6時から夕方6時まで、農場で無報酬で働き続けたという。日曜も地主の手伝いをさせられることが多く、外にでる自由は少なかった。チアパス州は、20世紀初頭のメキシコ革命後も農地改革が進まず、大地主の力が維持され、その下で隷属的に扱われる土地を持たない農民・先住民族が数多く存在した。

セルヒオさんらがラカンドン密林に入植したのは1960年。農場サン・マルティンに住む48人全ての労働者とその家族が農場主に反旗を翻す。彼らは3組に分かれて順次農場を去った。当時、土地を持たない農民による紛争が頻発しており、そうした人々が自主的に未利用国有地に入植する例が起きていた。チアパスの地域研究者である柴田修子さんのレポート「チアパス州東部における入植過程をめぐる研究動向」によると、当時、ラカンドン密林地帯は未利用の国有地が多く、土地紛争の解決策として政府は自主的な入植を黙認し、後に申請があったものに対し

て承認を与えた。政府主導の入植もあったという。セルヒオさんたちもこの状況を知り、密かに仲間と計画を進めていく。農場を去る日、農場主は激昂し、腰にさしたピストルを労働者に突きつけ、「そんなことができると思ってるのか!」と空へ数発撃ち放つ。それでも出ていく労働者たちを、「行かないでくれ。」と泣いて引きとめたそうだ。

鬱蒼と木々が茂る密林を開拓し築いた最初の集落で8年間暮らした後、子孫のためにさらに大きな土地が必要と考え、1969年、現在の集落を含む約1500ヘクタール土地を得てミゲル・イダルゴを建設。その後、他の入植地の人々と組織を作り、農場主や、政策を変更し入植者に圧力をかけるようになった政府から、土地と権利を守る闘いを繰り返した。83年にサパティスタと出会い集落全体で参加。土地を持たなかった時代の体験、その後の闘いの歴史と、サパティスタの掲げる自由と正義、性差別の解消など民主主義の徹底、新自由主義経済政策への反対が融合し、1994年の武装蜂起へと繋がった。

セルヒオさんの写真を撮らせてもらった。撮影をお願いすると、サパティスタのシンボルである黒い目出し帽を部屋から持ち出し日陰のベンチに座った。帽子からのぞく目が力強い。日に焼けた張りのある肌と、およそ年齢にそぐわない盛り上がる胸回りの筋肉がTシャツ越しに見て取れた。背はけして高くはないが背筋が伸びた凛とした姿。未だに現役で畑仕事に出向いている。「働くことが好きだ」と彼は話す。土を耕し生きてきた農民の姿だった。

2. 離れる人々

私の教師役ホルへは、99年から1年半米国へ出稼ぎに出ていた。農場の仕事が主だった。20万円ほどの仲介料を業者に払い、国境までの案内と仕事の紹介を受ける。仲介料は借金するが、米国へ渡れば2〜3カ月で返せたという。この集落で50代以下の大多数の男性が米国での出稼ぎ経験者だ。国境まで3日間砂漠を歩き密入国をした。麻薬マフィアとのトラブルに巻き込まれる場合もあると聞いた。現在は入国が難しくなったが、集落を出たうち20から30名が今も米国で暮らしているという。出稼ぎをきっかけに

サパティスタを抜ける人も少なくないと話す他集落の人もいた。

集落での主な現金収入はコーヒーとトウモロコシ。コーヒーは価格変動が激しく、トウモロコシに至っては400本250ペソ（1ドル=12ペソ）という安値で取引される。トウモロコシは自家消費が中心で、余剰分を売りに出す。その他フリホール豆、サトウキビ、ユカ芋、ネギ、かぼちゃなどを自家消費用に栽培している。個人としての収入源は限られており、出稼ぎが重要な収入手段となっている。

経済の問題は大きい。昨年訪ねた第4カラコル・モレリアで、「外国人が支援するとして何ができるか?」と聞くと、率直に資金援助が挙がった。カラコルの収入源には、カラコル所有の共有地で生産される家畜やコーヒー、販売される民芸品と、国内外のNGO等からの支援があると聞いたが資金的に苦しいようだった。

また、私が2012年12月に訪ねたチアパス高地の集落サンマルコス・アビレスでは、住民がサパティスタ派と反対派に割れ、集落内が緊張状態にあった。当初そこで暮らす全90家族がサパティスタ派だったが、現在は60家族が反対派になった。これにはサパティスタ派住民へ圧力をかける政府関係のグループの存在と同時に、政府が施す現金支給を中心とした農村支援を受けるため離れる人が多いという事情があった。2010年には、離れた人々が外部の反対派勢力から提供された武器を手にサパティスタ派の人々を襲い難民化させる事件が起こった。直接の死者は出ていないが、避難中に病を患い亡くなった幼い子供が複数いる。約1カ月後、カラコル、支援団体に守られ集落に戻る



朝、トウモロコシを挽く子=2012年12月サンマルコス・アビレス



集落内がサパティスタと反対派に割れ緊張が増す＝2012年12月サンマルコス・アピレス



サパティスタ支持基盤集落「12月24日」の小学校の授業風景。2013年1月

が、土地、家畜や収穫物が盗まれていた。家族の中で立場が割れ、親族に襲われたというケースも幾つか聞いた。現地のNGO職員の話では、現在も緊張状態にあり、パラミリタールと呼ばれる武装組織に攻撃を受けている集落も他地区にあるという。

ラ・レアリーダーで出会った人は、「多くの人々が離れていった。みんな忘れてしまったんだ。今電気、道があるところも、昔はなににもなかった。収穫したコーヒーを売るため、3日間担いで120キロの道を歩いたんだ。国は私たちに何もしてくれなかった」とチアパスに関心を払わなかった政府の態度と、その政府から援助を受けるために離れていった人々を非難した。サパティスタと深い関係を持つ人権団体 Frayba のある職員は「資金力の低さが自治を厳しくしている」と語った。

日本の農林水産省ホームページに、メキシコでは NAFTA 発行以降1994年から2001年にかけて、トウモロコシの農家販売価格が70%下落し、それにより経営が立ち行かなくなった200万戸以上の農家が農地を手放したとある。家族単位の零細農家が大部分のチアパスにおいて、サパティスタもそうでない人々も生活形態に差はなく厳しい状況に置かれていることに変わりはない。サパティスタに残る人々も、出稼ぎを利用し折り合いをつけているように感じた。離れていく人々を単純に非難をすることはできない。

3. 理念の実践

昨年1月、1週間滞在したサパティスタ支持基盤集落「12月24日」で、共有地で栽培するコーヒーの収

穫を手伝った。共有地の収穫物は各家庭へ平等に配られる。作業の日、リーダー格の30代の男性が「サパティスタにエゴイストはいないはずだぞ」と作業の手を抜こうとした若者をたしなめていた。

その会話が私には新鮮だった。10代から60代の様々な世代が仕事を共にし、そこでサパティスタのあり方が伝えられている。歴史を語ることもあれば、農業についての知識の交換もある。人々が持つ経験が自然な形で世代間を行き来し、受け継がれている。上の世代が如何に闘い今の集落が出来上がったかを、子どもたちも自分のことのように詳しく知っていた。この協働作業をサパティスタは何よりも重視している。

学校ではどうだろう。各集落にある小学校の教師は土地の人間に混ざって外国人もいる。「12月24日」には2人のチリ人が住み込み教育にあっていた。彼らはここに来て5年が経つ。カラコルで一定の研修を受けた後に配属された。元はチリの大学の先生と生徒。印象的だったのは、私が写真を撮っていたかと尋ねた時、先生はちょっと待ってくれと言ひ、生徒一人ひとりに意見を求めた。中には嫌がる子どももいるし、好奇心が強い子どももいる。ここでは撮ってもいいという子どもだけ撮影を許された（顔が分かる写真は発表しないという条件で）。上から押し付けることはせず、それが子どもでも、それぞれの意思表示を促し意見を尊重することが方針としてあるのだという。

もう1つ印象的だったことがある。1年前にレアリーダーを訪ねた時、地区の教育部門責任者と少しだが

話す機会があった。その責任者の男性は綺麗に髪を伸ばし、化粧をして胸にパットを入れていた。私はこれまで保守的な先住民社会を見ることが多かった。そこでは男性が女性的な振る舞いをするこ

とは、非難・差別の対象にさえなりえた。しかし、ここではそれを揶揄する人はおらず、自分の生き方を貫いていた。本人の力量さえあれば責任ある役職が任されることを目の当たりにした。個人の表現の自由とサパティスタの掲げる性差別撤廃の実例だ。

第2カラコル・オベンティックの建物
ンティックの建物
に、カタツムリの絵
とともに



オベンティックの建物に描かれたメッセージ LENTO, PERO AVANZO.(ゆっくりと、それでも前進する) =2012年11月

「LENTO, PERO AVANZO.(ゆっくりと、それでも前進する)」と書かれている。組織を離れる人がいる一方で、サパティスタが掲げる理念は実践を通し、この言葉通りゆっくりとだが、根付き次世代へ受け継がれていると感じた。

4. 土地と自由

サパティスタが武装蜂起の際に「貧しい農民にとって死刑宣告」と呼んだNAFTA(北米自由貿易協定)は、メキシコ社会を底で支えてきた人々に大きな打撃を与えた。メキシコの全国農業生産取引業連合(ANEC)ビクトル・スアレス執行理事はインタビューの中で1994年以降米国からの輸入増はメキシコの農民の生産を圧迫し、メキシコ農民の4割が離農したと答えている。

メキシコ全体で農産物は輸出入ともに大きく伸びている。それは、国内北部で展開される外国資本を中心とした大規模農場によるところが大きい。しかし、依然、総人口の約半数が貧困層であり、その大部分が農村で暮らしているという状況は変わってい



集落に描かれたメッセージ LA TIERRA ES DE QUIEN LA TRABAJA!(土地は働く人間のもの) =2012年1月「12月24日」

ない。農村で仕事・土地を失った人々は、大規模農場・工場地帯のある北部へ、また国境を超え米国へ労働者として吸収されていく。まるで歴史を逆に辿るようだ。

日本と同じく、メキシコが交渉参加を表明したTPP(環太平洋経済連携協定)に関しても、生活に苦しむ零細農家のためではないだろう。

自分の土地で、自ら主体となり働き、収穫したもの食して生きることが、人としてのあり方と考える人たちにチアパスで出会った。以前取材をしたコロンビア、ペルーの先住民がそうだった。その土地で如何に食べ物を得ていくかという知恵と技術を上の世代は子や孫に生活の中で伝える。そこで文化が育ち、社会が築かれる。経済活動ではなく、生き方としての農業に幸せを感じる人々がいる。しかし、この価値観を外部の人間は後進的とよび、時に都合よく伝統的という言葉で表現する。そして、経済発展の名のもと、当人は選択の余地なく生活を奪われていく。

武装蜂起から20年。世界は驚くべき早さで変化し続けている。力のないものを容赦なく振り落としながら。

この世界を前にして、貴方は何を大切に生きるのか? 1人ひとりが、自分の立場で向き合わなければいけないこの問いかけに、サパティスタは今なお強い光を持ち、1つの方向を示し続けていると感じた。

サパティスタの若い男性が「私たちが望むものは土地と自由です。」と私に言った。シンプルだが力強い言葉だった。

サパティスタ民族解放軍は25万人の 先住民を統治する

ラウラ・カステジャーノス

チアパス州モレリアのカラコルにて

チアパス州の森林地帯の只中にあるサパティスタ管轄の5地域のひとつモレリアのカラコルの上空には、午後の青空が広がっていた。未婚女性3名と既婚女性2名、3名の男性で構成される地域の最高権威である善き統治評議会(JBG)のメンバーが部屋に入ってきた。私たちの訪問の目的を確認し、立ち入りを許可するかどうかを決定するためである。誰も顔を隠していない¹⁾。給料も受け取っていない。若い女性は木綿のブラウスと色鮮やかなズボンを着ている。1人の既婚女性は、後帯機で織ったツェルタルの伝統的なウイピルと巻きスカートをもっている。全員がノートを持ち、私たちの名前をメモしている。「なぜ、ここに来たのですか?」と、17歳前後と思われる1人の若い女性が、真顔で私たちに尋ねた。私たちは、連邦・州政府との関係を全面的に絶って、サパティスタ独自の統治、司法、教育、医療の在り方を構築しようとするサパティスタの自治の営みを目撃することになったのである。

EZLNに近い信頼できる情報源によれば、サパティスタ自治体制の下、27のサパティスタ叛乱自治地区(MAREZ)には、ツェルタル、ツォツィル、トホラバル、チョル、ソケ、マムに属する25万人以上の先住民が生活している。この数は、国立統計地理情報研究所の統計で114万1499人というチアパス州の先住民人口の21.9%に相当する。

北米自由貿易協定発効の日である1994年1月1日、EZLNは、先住民族のための土地、食料、仕事、医療、教育、住居、正義、平等を求めて、武装蜂起した。現在、20年が経過し、サパティスタ運動は自分たちの達成した成果について広報活動を行っている²⁾。たとえば、医療に関しては、外科設備を備えた4つの地域病院(グアテマラ国境隣接地域、チアパス高地、ツォツ・チョフ地域、ラカンドン密林地帯)。最後の地区の病院「ラモナ司令官病

院」は出産と女性の健康の専門病院)がある。さらに10以上の行政地区診療所が設立され、1,100名以上の出産補助師や1,500名もの薬草専門家を養成している。

中心的な担い手

教育に関して、メキシコ大学院とパリ・ソルボンヌ大学で社会科学博士号を取得したブルーノ・バロネーは、『自治と先住民教育-チアパス・ラカンドン密林のサパティスタ学校』という本を出している。彼によれば、5つのカラコル管轄地域には500以上の「抵抗する」小学校と中学校があり、1,500名の教育プロモーターが授業を担当しているという。これらの学校を卒業した4万5千人を超える若者が共同体に赴き、医療、教育、通信の問題を担当し、エヒードや自治行政地区の権威者となっている。

生産部門に関しては、サパティスタは2つの銀行を創設している。そのひとつがサパティスタ女性自治銀行(BANAMAZ)である³⁾。さらに、エコロジー型農業、牧畜業、共同体売店、ブロック生産工場、パン屋、民芸品生産、薬草生産などに携わるいくつもの協同組合も創設し、さらにはコーヒーをイタリア、フランス、ギリシアに輸出している⁴⁾。

『メキシコの自治と先住民の権利』をはじめ先住民政策に関して20冊もの著作があるフランシスコ・バルセナスは、この20年間、先住民が政治という舞台上で周縁的なアクターから中心的なアクターへと変わっていく事態を引き起こしたのはEZLNと考えている。「この20年間、メキシコやラテンアメリカの重要な闘争の多くは先住民族が主役となって展開してきたものである」と述べるとともに、「先住民族の生活の質や権利に対する敬意は20年前のままであり、劣悪になっている場合も少なくない。しかし、その責任はサパティスタではなく、政府の政策に起因している」と指摘している。

カラコル

「私たちは悪しき政府から支援を受けない。私たちには自分たちの労働や努力がある。しかも、私たちは全員の幸福を望んでいる」と、オベンティックのカラコルのサパティスタ民兵はサパティスタ自治として理解している内容を語った。たとえば、サパティスタ医療施設では、サパティスタも非サパティスタも診察している。ある民間の情報提供者は、オベンティックの小病院には、緊急治療、外科、産婦人科、眼科、歯科、内視鏡と超音波などの診療があり、「制度的革命党（PRI）支持者、アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール（民主革命党）支持者、連邦兵士」の受診も受け付けていると私に言っている。

サパティスタの5つのカラコル（ラ・レアリダ、モレリア、ロベルト・バリオス、ラ・ガルーチヤ、オベンティック）は、2003年8月に創設された。その引き金を引いたのは、2001年にサンアンドレス合意が諸政党によって反故にされたことだった。その合意は国内の先住民組織や知識人たちの7年間の交渉を取りまとめたもので、先住民の自治の権利、正義と平等を憲法として認めるというものであった。5つのカラコル創設に当たって、EZLNは憲法として認められなかった自治行使の権利を実践することにした。

27の自治行政地区は、グアテマラとの国境隣接地域、ラカンドン密林、チアパス高地森林地域、ツォツ・チョフ地帯森林地域というチアパス州の約3分の1を占める回廊に分散しているため、カラコル管轄地域は領域に従って構成されている5）。

各カラコルはそれぞれ独立した固有の内規に従って機能している。しかし、内外の紛争に対応し、共同体間の諸問題を調整する役目を担うJBGの構成メンバーは総会で選出されることが共通の決まりとなっている。JBGの役職は水平的なもので、それぞれの活動は公表される。カラコルごとに異なっているのは、JBGの構成員の人数であるが、平均すると24名前後である。役職の担当期間も異なるが、多くは3年間で、1～2週間毎の輪番担当制である。共同体

の他の代表と調整するやり方も多様である。どの役職も無給である。しかし、協同組合などの活動を通じ、共同体は各役職者にトウモロコシを供与し、権威者やプロモーターの移動経費を補助している。いくつつかのカラコルでは、月のうち10日は共同体のための奉仕、残り20日は家族の生計維持の活動といった基準が定められている。

近刊予定の『政治の脱植民化－サパティスタ運動、自治と先住民族』の著者であるマリアナ・モラは、政府援助を受けず、集団的な意思決定に基づき、若者や女性のエンパワーメントを実践しながら、EZLNがカラコルを強化したことによって、「政治の責務を倫理に変換した」と断言している。農民向けエコロジーと健康の能力養成センター

（CCESC）の研究者マルコス・アラナは、その成果を社会化するには、「それを実践するという点では閉ざされてきた」共同体は外部に門戸を開いていくことが肝要と言っている。

カラコルの抱える最大の懸案事項は司法システムである。EZLNがシンパに成果を分かち合う目的で開催された2013年8月のサパティスタ・ミニ学校のために収録されたビデオ資料で、一人の民兵が、殺人犯、暴行犯、泥棒を再適応させるための施設やプログラムが欠如していることを指摘している。彼は次のように説明している。「いったい、誰が彼らの対応をするのか？誰が彼らに食事を提供するのか？病気になった場合の世話は誰がするのか？こんな風に、一部の者は私たちに不平を漏らしてきた」

サパティスタ効果

サパティスタの闘いを支えている基軸の一つは、国際労働機関169号条約である。メキシコも批准しているこの条約は領域、協議、自決権、自治、差別されないことなど、先住民の集団的権利の復権を謳っている。

EZLNは先住民族の自治構築のさまざまな過程に影響をもたらした。そのひとつに1997年以降の共同体警察の台頭がある6）。現在、ゲレロやミチョアカン州の数十もの行政地区に共同体警察は存在し、ミチョアカン州チェラン7）のように森林警護

隊として活動するものもある。また、共同体が連邦電力委員会への電気代支払いに「抵抗」という運動を喚起し、現在、抵抗の共同体は国内の16州にあり、「高額電気料金抵抗全国ネットワーク」に結集している。また、ベラクルス州エスピナルの代替通貨トゥミンのような「金融叛乱」のプロジェクト、さらには巨大開発計画から領域や自然資源を防衛しようとする市民・先住民の闘いの出現も誘発してきた。

ダム建設被害者河川防衛メキシコ運動

(MAPDER)、鉱山開発被害者ネットワーク (REMA) などの市民運動によれば、巨大開発事業に反対している共同体紛争は国内に55件以上もある。バルセナスは次のように他の事例も挙げている。「EZLNは、ヤキの水防衛闘争、ナワ、ウィシャクリ、ミシュテコ、サポテコの鉱山開発反対闘争、サポテコ、イコート、キリワスの風力発電計画反対闘争など8) にインパクトを与えてきた」

さらに、「人民はいかなる時も政府の形態を変更し修正する譲渡不能の権利を保有する」と謳う憲法39条を根拠に1994年に蜂起したサパティスタ運動は、武装という手段や自衛の権利という理念を普及させることになった。2011年10月から2013年12

月にかけて、憲法39条を根拠に、組織犯罪に対抗する市民の防衛隊が、ミチョアカン州では十数に及ぶ行政地区、ゲレロ州では11の先住民行政地区で次々と組織された。

メキシコ以外でも、サパティスタのイデオロギーは新自由主義システムに反対する「別の世界は可能である」運動、現在ヨーロッパで展開している「怒れる人々」という運動の先駆けとなる運動、アメリカ合衆国の「オキュパイ」運動などに点火することになった。

新しい時代

マヤの暦によれば一時代の終末の日と予言されていた2012年12月21日の早朝、4万人のサパティスタが、サンクリストバル・デ・ラス・カサス、オコシゴ、アルタミラーノ、ラス・マルガリータス、パレンケ市の中心地区に姿を現した。行進参加者はシンボルの黒い目出し帽を着用していた。その日は、副司令官マルコスが次のように書いた日だった。「聞いたかい？それは、支配者の世界が崩壊する音である。我々の世界が再生している音である。昼であった昼は夜だった。そして、夜は、昼となる昼になるだろう」（ユニベルサル紙2014年1月2日付け、訳・小林致広）

- 1) 他のカラコルと異なり、モレリアでは、撮影時以外、役職者も目出し帽を着用しない。
- 2) 2013年8月以降、2013年12月、2014年1月と3回実施されたサパティスタ・ミニ学校の取り組みである。各回、2~3千人が共同体で住み込み学習体験をしている。
- 3) もう一つはサパティスタ自治銀行 (BAZ) である。
- 4) オベンティック管区のムトゥ・ウィツ、モレリア管区のヨチム・タエル・キナル、ロベルト・バリオス管区のシスト・レキル・ルム、ラ・ガルーチャ管区のスマリエルなどのコーヒー生産者協同組合が有機コーヒー生産に取り組んでいる。
- 5) サパティスタ自治行政地区はもっとも多い時期には38あったが、カラコル体制発足時には29地区で、その後、MAREZの新設や再編が行われ、2013年時点では27である。モレリア管区では、2003年の7つのMAREZが2013年は3つに統合再編されている。
- 6) 最初の共同体警察は、1995年10月、先住民トラパネコ・ミシュテコ居住地域で設立された。共同体権威者地域審議会傘下の共同体警察 (CRAC-PC) は、現在200近くの共同体で組織されている。2012年末から2013年初頭には、ゲレロ州民衆組織連合傘下の市民警察 (UPOEG - PC) やゲレロ州北部の市民民衆警察 (PCP) も組織された。
- 7) 先住民族プレペチャ居住域のチェランでは、2011年4月に違法木材伐採を監視する自治組織「篝火」が組織され、2012年2月には共同体上級審議会が発足している。
- 8) 三菱商事も出資するオアハカ州テワンテペック地峡部の海岸砂州に風力発電基地を建設する「マレーナ・レノバブル」計画には、地元の先住民サポテコやイコートの共同体が反対している。下級審では計画差し止め命令が出されたが、現在も係争中である。

ミチョアカン州の麻薬密輸組織「テンプル騎士団」 違法採掘の鉄鉱石を中国に輸出 軍がラサロ・カルデナス港を制圧 (上)

新聞『ラ・ホルナーダ』 ロイター、2014年1月3日

ミチョアカン州を縄張りとする麻薬密輸組織「テンプル騎士団」カルテル(「ラ・ファミリア・ミチョアカナ」の分派)は、事業の多角化を進める一環として鉄鉱石を中国に輸出し、巨額の資金を得ていた。これに対してメキシコ政府は昨年11月、海軍を派遣し、ラサロ・カルデナス港を制圧した。

メキシコ西部、ミチョアカン州の製鉄業の街・ラサロ・カルデナスは、麻薬密輸の重要な中継点であるが、同時にそのコンテナ港は急速に発展中で、太平洋岸で戦略的な位置を占めている。中国貿易のための拠点でもある。ラサロ・カルデナス港はわずか10年前に貨物港として開港したが、世界最大級の貨物船を受け入れることのできる深い湾であることから、アメリカ市場向けのアジア製品の荷降ろしをするうえでロサンゼルスと競合し始めてきた。だがメキシコ政府が街の秩序を回復し、街を牛耳るテンプル騎士団カルテルを制圧しないかぎり、将来の発展は望めない。

ミチョアカンはメキシコ国内でもっとも多く鉄鉱石を生産する州で、世界第2位の経済大国・中国の鉄鉱需要を満たすため、中国との取引は非常に活発である。しかし鉱山は、より合法的な事業からの収入を増やしたいテンプル騎士団のような暴力組織にとってもチャンスだった。

「鉱山は劣悪な環境で採掘がおこなわれていた。鉄鉱石は小船やボートで違法に運び出していたのではない。港から税関を通し、船に積み込んで正規に港から出荷していたのだ」。ミチョアカン州

知事ファウスト・バジェホは11月4日、海軍が港を制圧した際に、このように述べた。

テンプル騎士団は、強い影響力を持つ犯罪集団で、役人を買収し、企業や不動産業者や農家を恐喝することで知られていたが、鉱山業にも参入してきた。

地元の労働者によると、ラサロ・カルデナスから1時間、山道の向こうの人目につかない小さな村に昨年、鉄鉱石を港に運び出すためにカルテルは数百台のトラックを集結させたという。アルテアガというその村は、テンプル騎士団を率いる元教師の「ラ・トゥタ」ことセルバンド・ゴメスが生まれた村である。ラサロ・カルデナスの街は、40年前に政府が製鉄業を立ち上げるまではココヤシで知られていたにすぎなかったが、ゴメスはその将来性を見越していた。

犯罪集団のトラックは中国の需要を満たすべく、ミチョアカンの鉄鉱山の間を素早く動き回り、これによって前年までは100万～150万トンだった鉄鉱石輸送量が、10月までに400万トンにまで増えた。

地元の公務員や鉱山業者、事業家らの証言によると、その事業にはいくつかの大きな柱があるという。まずひとつめが、テンプル騎士団が鉄鉱石の輸送をコントロールしている点である。数年前にこのグループが街を支配下に置くと、カルテルは地元の運送業組合に、保護と引き換えに支払いをするよう要求した。

また、採掘権を持つ業者がいなかったり、あるいは採掘権を持っていても業者が実際に利用していなかったりする鉱山地区を、地元の採掘業者が不法占有するのを手助けした。そうして騎士団が手数料を要求するようになったのである。

そして最後に、カルテルは税関の役人に圧力をかけ、鉄鉱石が港から問題なく搬出されるようにする。ある地元の公務員によると、「鉱山業に従事するグループの大部分はテンプル騎士団かその一味だ。何から何まで支配している」という。

その公務員によると、中国バイヤーのさかんな需要から利益を得て、地域の鉱山事業の約半分は、2013年には必要な許可なく行われたというが、自分の名前は出さないでくれと頼んだ。

個人名を出して話をした場合、危険な目にあうことがある。地元企業家らによると、大手製鉄会社ア

ルセロルミタルのある職員は、違法な鉱山開発を当局に告発したところ、4月に銃撃され殺害された。

ある匿名希望のアルテアガの鉱山業者によると、かつて経営していた鉱山では、未精製の鉄鉱石を中国人ディーラーにトン当たり32ドルで売り、トン当たり5～7ドルの利益になっていた。彼の計算によれば、中国ではバイヤーは鉄鉱石を売ってトン当たり15ドルの利益を得ることができただろうという。

テンプル騎士団が地元の鉄鉱石の供給の大部分をコントロールおり、カルテルが中国人クライアントに、買わないと仕返するぞと脅迫したのだとメキシコ政府のある匿名の警察関係者は述べた。

中国がメキシコの鉄鉱石を購入することに組織犯罪がかかわっている事実は、このアジアの大国とのきずなを強めようとしていたエンリケ・ペニャ・ニエト大統領にとっては問題である。(つづく)

(訳：山本昭代)

《お知らせ》

『メキシコ麻薬戦争 ——アメリカ大陸を切り裂く犯罪者たちの叛乱』(ヨアン・グリロ著、山本昭代訳、現代企画室、予価2200円)が2月に刊行予定。

メキシコや中米地域で近年、さらに混迷を深めている麻薬マフィア関連の暴力や汚職。メキシコでは2006～2012年のカルデロン前政権時代、組織犯罪に関連した死者は12万人ともいわれ、低強度戦争といってもいい状況である。2013年以降、ペニャ・ニエト政権に移行してからも改善はみられない。

本書は、この麻薬戦争の全容を描き出すもので、麻薬密輸の歴史からひもとき、密輸やマフィアの実態に迫り、さらに彼らの独自の文化や信仰、将来の方向性までを探る。日本ではほとんど報道されることがないが、この暴力のスパイラルともいえる現状は、グローバル化と新自由主義が世界の各地に生み出しているひとつの状況である。

グアテマラ コーヒー物語 1

「カフェ・インディオ」との出会い

マヤコーヒー代表 高木三四郎

コーヒーを日本に輸入し販売するようになったのは、海外放浪のときに縁があったグアテマラと何か仕事がしたいと思ったのがきっかけです。グアテマラといえばコーヒー豆が有名です。1990年代のはじめころは、有機栽培無農薬のコーヒー豆は日本ではほとんど流通していなかったもので、素人の私が新規に参入しても活路が開けるのではないかと気軽に考えて、グアテマラに向かいました。

専門的な知識は皆無でしたので、まずつてをたどって、無農薬でコーヒー豆を生産しているというサンタロサ県のコーヒー農園に行き、コーヒー豆のサンプルを入手して、グアテマラシティにある農薬検査所に持ち込みました。が、なんと有機リン系の殺虫剤が検出されてしまいました。なので、次にグアテマラ国家コーヒー協会（ANACAFE）のコーヒー研究所を訪ねてみることにしました。グアテマラでは、外貨の稼ぎ頭であるコーヒー豆は国家統制品で、国をあげてコーヒー豆の生産性向上や輸出に取り組んでいて、ANACAFEのコーヒー研究所は権威あるところでした。そこの所長に面会してこちらの希望を伝えると、「キチェ県のイシル地域に行きなさい、そこにはカフェ・インディオという幻のコーヒー豆があり、それがあなたの望むコーヒー豆である」と教えてくれました。

カフェ・インディオとは、インディオと呼ばれているグアテマラのマヤ系先住民の農家が小規模で生産しているコーヒー豆のことです。（インディオという言葉は差別的な意味としてある一方、自然なもの、在来種などの意味としても使われ、所長の言葉は後者の意味で、むしろほめ言葉です）

イシル地域というところは、グアテマラの北部、メキシコと国境を接するキチェ県にあり、ネバツハ・コツツアル・チャフルの3市を結び「イシル三

角地帯」といわれ、人口の90%以上がマヤ・イシル人で、伝統的な生活を営んでいます。グアテマラ内戦当時の最激戦地区で、国内外に数万人の難民が流出し、地域共同体に深い傷跡を残しました。

カフェ・インディオの特徴は、まず、生産主体である農家が、主食であるトウモロコシや豆、野菜を自給自足していることに加えて、換金作物であるコーヒーも、種を採取して苗を育て、肥料も自給しているという、小規模ながら自立した農業の農産物であるということです。一方、一般的なコーヒー農園というのは、コーヒーの苗木を買ってきて育苗し畑に定植、買ってきた化学肥料と殺虫剤や殺菌剤を散布してコーヒー豆を栽培します。

キチェ県イシル地域というのは山間部にあり、ひとつの村でも標高差が200m以上あり、ほかの作物には不向きな急斜面にコーヒー畑があります。標高差があると、同じ品種で同じように栽培しても酸味などの味に変化がでできます。栽培している品種の多くはアラビゴ種やボルボン種という原種の品種で、採集した種をまくとまた同じ品種の木になります。原種のコーヒーの木は5mもの高さになりますが、斜面では、山側にまわると、木の上のほうになっている実も容易に収穫できるという利点があります。また、害虫が高所まで飛んで来れないので被害があまりありません。大農園では平なところに畑があることが多く、背が高くなる原種の品種をきらって、交配種である背のあまり伸びない品種を好みます。交配種であることから種は自給できません。

コーヒーの実が赤くなると収穫時期になり、一粒ずつ手で収穫して、水に浸した後に歯車のついた分離機にかけて、赤い果肉と、そのなかにある白い皮つきの種とに分離します。この赤い果肉は糖分が多く、よく発酵しますので、落ち葉や鶏糞などとまぜ

て発酵させて、肥料としてコーヒー畑に返します。これを循環型農法と呼びます。また、コーヒーの木は乾燥をきらうことから直射日光をさけ、霜があたらないようにするための陰をつくるシャドーツリーをコーヒー畑に植えます。イシル地域ではそのシャドーツリーとしてクシンというマメ科の木を植えます。ジャックと豆の木という童話がありますが、マメ科の木は成長が早く、高さ15~20mにもなり、枝は四方に大きく伸びて日陰をつくります。このクシンの木の葉はミネラル分が豊富で、落ち葉となって畑に栄養を与えます。このようなところからも農家の苦心がうかがえます。

コーヒーの原種というのは、定植から4年くらいで実がつきはじめ、5年日以降に徐々に実をつけていきます。木の寿命が長く、10年以上にわたって収穫できますし、収穫が少なくなってくると、根元から30cmくらいのところで幹を切りますと、しばらくして新しい枝が何本かそこから生えてきます（彦生え）。それを一本にしたてて成長させると、数年後にはまた収穫ができるようになります。ある農家では、そこのおじいさんが50年以上前に植えた木の根元がまだ活躍しています。原種の場合、花が咲く時期は、一つの枝に1週間から10日おきに数回にわたって、いたるところから花が咲き、収穫期になると、花が先に咲いた順番に実が熟していきます。標高差もあることから、収穫期は1月中旬から4月をはじめまで続きます。また1週間くらいかけて天日乾燥させるので味や香りを逃しません。

一方、交配種は、収穫の効率性をはかるために品種改良されていますから、定植から3年目で実がつきはじめ、5年くらいでピークになり、それが数年続きます。花は、枝に一度に咲き、実もほぼ同じ時期に熟するので、収穫期が短く、労働集約ができますが、一時期に収穫しなければならぬので、人手を多く必要とし、用具や機械や倉庫なども大型化してきます。収穫した豆は機械乾燥しますが、熱風で短時間で乾燥させるので、味や香りが飛んでしまいます。また、実が同時に大きくなり熟してくることか



ら土地の栄養分が奪われるので、化学肥料を大量に投与しなければなりません。そして、効率を優先した品種改良の結果、病害虫に弱く、農薬の散布もしなければなりません。また、木の寿命もみじかく、10年もすると新しい苗と交代させなければなりません。さらに、味や香りも原種に比べて劣ります。

この「カフェ・インディオ」が幻のコーヒー豆と呼ばれるわけをまとめると次の通りです。

1. 標高の高い、霧が立ち込める畑で、循環型自然農法で栽培し、収穫した豆を天日乾燥していること。
2. 味や香りが優れている原種のコーヒー豆であるアラビゴ種・ボルボン種・マラゴシッペ種など色々の品種が植えられていて、畑が急斜面で標高差が大きいいため、畑の段階でコーヒー豆のブレンドがなされていること。
3. 2000年代にはいるまで、イシル地域は道路網が整備されておらず、収穫物を出荷するには大変な労力が必要で、この地域のコーヒー豆が市場にあまり出回っていないこと。

それで私は幻のコーヒー豆をもとめて、イシル地域に向かうことにしました。キチェ県の県都のキチェ市まではグアテマラシティから毎日、何本ものバスが出ているので、その日のうちにたどり着くことができます。キチェというのは木がたくさんあるところという意味ですが、道路沿いは畑がずっと広が

り、山のうえのほうまで開墾されていて、森などは全然見られません。

キचे市からイシルの町ネバツハまでは、くねくねとした道が山と谷をぬけて延々と続きます。今でこそ、道路は舗装されて毎日たくさんの大型バスやマイクロバスが運行して5時間ほどで行けますが、1990年代当時は週に何便かのバスの運行のみで、それに乗れなかった場合は、飲料メーカーなどの配送トラックの荷台に乗り、断崖絶壁の岩だらけの土漠のような山道を土煙にまみれてまる1日かかりました。ですからネバツハに行くときはいつも覚悟を決めていったものです。

ネバツハは標高約2000mに位置し、周辺もふくめて人口約3万人で、住民の大部分がイシル人です。イシル地域の女性の民族服は、赤い地に白い縦線がはいった腰巻と、動物や植物の刺繍がほどこされた上着で、地元の女性は皆着用しているので、他所からきた女性は一見して区別できます。ネバツハは、水のある所という意味で、一般住宅の年間の水道料金は数百円という、水不足のグアテマラシティとは大違いです。

ネバツハからコーヒー豆をもとめて、周辺の村に行くのですが、自動車道路が整備されていなかったため、ラバの背にゆられて山道を7時間もかけて産地をめぐることもありました。初期のころ、すなわち1990年代はまだ内戦の傷跡があちこちに見受けられ、よそ者にたいする警戒心がとても強くありました。われわれよそ者だけで村に入っていくと住民は家の中にもって戸を閉めてしまい、とりつく島がありません。夜になって雨が降ってきて家の中には入れてもらえず、かろうじて軒をかりて一夜を過ごしたこともありました。畑を撮影しようと思っただけで旧式の大きなビデオカメラを向けた時には、なにかの武器に取り違えたらしく人々が突然右往左往して、やめてくれと叫ばれたりしたこともありました。

それでも何年間も通ううちに、段々と信頼関係もできて、農家に泊めてもらうまでになりました。クシンというニックネームまでつけられたくらいで

す。シャドーツリーであるクシンが高い木なので、私の高木という苗字からそのニックネームになったのかも知れません。

私のようにコーヒー農家をたずねてコーヒー豆を買う人のことをコヨーテと村人は呼んでいます。

(コヨーテとは、アメリカ大陸にひろく生息している犬科の野生動物ですが、ラテンアメリカ人による米国への不法入国請負人のことにも使われます。)

コーヒー農家からコーヒー豆の現物を買うときには、買い取りの合意ができれば、サンプルのコーヒー豆を少し取り出して、豆についている白い皮を両手でこするようにして取り除きます。そして、まず色を見て、きれいな深緑色かどうか確かめます。果肉がついたまま放置したり、水洗処理が適切でないと、赤い色素が残って発酵豆の疑いがあります。次に匂いを嗅いでカビやその他の異臭をチェックしてから、一粒かじってみます。乾燥が十分でない豆は、かじるとすぐにつぶれてしまいます。そんな豆を買ってしまうと、また乾燥し直さなければならぬし、再乾燥で水分がなくなった分、目方が減ってしまいます。それらのチェックにパスした豆は、まず袋を入れ替えます。中に石ころなどの異物がはいっていないか確かめてから計量します。小屋の梁からつるした1mくらいの鉄製の長さの天秤式の秤で、1キントール(46kg)ずつ計ります。計り終わると、豆と現金とを引き換えます。

買い付けの時にはいつも大量の現金をもっていましたから、身の危険も感じたので、毎回違う車で行ったり、いくルートや時間を変えたりと苦労しました。また、夜の山道にはよく山賊があらわれて身ぐるみはがされてしまうので、夜は絶対に移動しないようにしていました。今は、分割払いや銀行送金も受け付けてくれるようになり、その心配もなくなりました。インターネットもつかえるようになり頻りに交信することもできます。20年前のことは自分でも、前世のことかと思うほど隔世の感があります。

詳しくは「カフェマヤ」のHPをご覧ください
<http://www.cafemaya.com>

第70景 ラ米に恋した半世紀

私は立教大学池袋キャンパスにあるラテンアメリカ研究所（ラ米研）で2005年4月から9年間、「現代ラ米情勢」という講座を講師として担当してきた。14年1月11日、同僚の清水透講師とともに「日本におけるラ米研究・報道の50年」という公開対話講演会（司会・飯島みどりラ米研所長）で話した。ラ米研創立50周年記念行事の一環として催された会合であり、「打ち上げ大型講座」となった。通常最終講座は1月18日で、これをもって授業はすべて終わった。3月末で身を引く。

9年間は長かった。人生のほぼ8分の1の、おそらく私の晩年のまとまった一時期となるだろう。受講生は述べ350人に及ぶ。学生、大学院生、卒業生、社会人と多様で、社会人が圧倒的に多かった。毎年授業料を支払って、働く者にとって貴重な土曜日の午後、池袋に通って講座に出席する。みな意識した受講生であり、講師としては極めて講義しやすかった。長期の欠席者も時にはいた。だが、その穴は「もぐり」の受講生がちゃんと埋めてくれた。毎年少なくとも1回はやった公開講演会には、学外から多くの市民が聴きに来た。この人たちを加えると、聴講してくれた人々は2000人に達するはずだ。

50年前、私が大学生だったころ、ラ米と言えばスペイン語、「ラテン音楽」、考古学・文化人類学、貿易、移民だった。ところが今や、ジャーナリズムからラ米を捉える私の講座を聴く者がいるのだ。日本人の生き方、考え方、趣味などが多様化し、関心が広がったのだろう。また、ラ米全域に目配りしていたいという人が一定数いるということに違いない。

私はラ米研講師になる前に、15ぐらいの大学から招かれて一回限りのラ米講義をしていた。その経験を参考にしつつ、アカデミズムの府であ

る大学でペリオディズム（ジャーナリズム）を語る意味や方法論を考えた。その結果、「現代ラ米情勢」を開いた。ジャーナリズムは毎日、世界史の最先端で刻一刻過ぎてゆくあらゆる人間の営みを把握し、分析し、報道する。それが歴史家に材料や資料を提供する。現場で当事者にインタビューし、状況を観察しつつ書き書きする。これは歴史学の「口承記録法」として変わらない。ここにも接点を見出した。

9年間も講座を続けることができたのは、日々に新しく、繰り返しが無いジャーナリズム故である。同じ教材を使うことはない。この理屈で言えば、心身ともに元気である間は語り続けることができる。だが、やがては歴史から別れなければならない。ロケットは上昇能力を失う時、重力の虜となって落下する。いずれ、私は日々の歴史を記録するジャーナリズムから乖離し、離れ去っていく。

恋愛は誤解であり、だからうまくいく。先人から教わった。正解を得れば、あらが目立ち、情熱は覚め、破綻する。私はラ米とジャーナリズムに長らく恋をしてきた。つまり誤解してきた。だが、誤解が昂じると正解になる。半世紀の取り組みは正しかったのだ。そんな気持ちがしないでもない。だが、これこそが、「とんでもない誤解だ！」私の中の批判者が、そう叫んでいる。たぶん、誤解だと認識することが、まさに正解なのだろう。この私の内なる論争は、しばらくは続くはずだ。今言えるのは、私は少なくともラ米から振られたことはない、ということだ。

月刊誌LATINA 2月号（1月20日刊）の連載企画「ラ米乱反射第96回」は、「『第3のメキシコ』を築いた現代のサパタ主義者たち」、「EZLN蜂起20年—マヤの地に甦った革命の系譜」です

日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (LIJAL)の活動から グアダハラブックフェアと 公立図書館訪問

鋤柄史子

昨年11月30日から12月8日まで、メキシコのグアダハラにて国際的なブックフェア (Feria Internacional del Libro de Guadalajara、以下FIL) が開催されました。私は4日間ここに足を運びました。今回はFILの様子とともに、街の図書館についてもお話しします。

身にしみるような寒さが続いていた東京を離れてグアダハラへ向かい、朝を迎えた時、太陽の暖かさを身体いっぱいに感じました。時差ボケも気にならず、早速FILの会場へ。FILは、年に一度開かれるラテンアメリカ最大のブックフェアです。メキシコ国内のみならず他の中南米や欧米等の出版社が各々のブースに本を並べ、会場を埋め尽くします。開催期間中は一般に開かれた時間が設けられていて、その時間になると会場の人口密度がぐっと高くなります。国内外の著名な作家の講演会やサイン会、表彰式が行われる等、まさに本の祭典、ビジネスの場としてのみならず、老若男女問わず集う交流の場としても盛り上がっていました。イタリアの作家、アレッシンドロ・バリッコの講演会の質疑応答では、愛と死について人生相談する若者の姿もありました。会場には9日間で75万の人が訪れたそうです。滞在期間中、常に感じられたのは人々の熱気です。それは会場の中だけではありません。会場へ向かうバスは平日でも朝昼間問わずいつも満員でした。また、宿の従業員もバーで居合わせた男性もFILの事を口に出すと、自分の好きな本について熱く語り出しました。

滞在最終日、市街地にある図書館を訪れました。オクタビオ・パス中南米図書館と呼ばれるその図書館の奥に進むと、一面に子どものためのス



ペースが用意されていました。平日の昼間だったので子どもはいませんでした。児童室担当の司書の方に話を聞く機会を得ました。本は対象年齢ごとに分けて作家順に並べられ、選書は日本の公立図書館とだいたい同じ方法をとっているようでした。ただ、ここでは貸出しが行われていないということでした。これは子どもに限らず、大人の利用者にとっても同様でした。この図書館が大学付属であることがその一つの要因でしょう。ただ、街の中心にありながら、図書の貸出しが権利として認められていないことに市民は不便さを感じているはず。理由を尋ねると、盗まれる可能性があるから、という返答でした。

児童室は休日になると、近所の親子連れから観光客、あるいは物売りの子どもたちなど様々な来客があるようです。6畳程のスペースに、あらゆる子どもたちがごった返すのです。休日の児童室にはFILで感じたのと同様の熱気がたちこめるのでしょうか。図書館を出て宿へと帰る道すがら、その様子を想像して顔をほころばせると同時に、閉館時間を気にすることなく本を読みたい子らのために、何とか図書館の貸出しを実現してほしいと強く思いました。

「コンドルは飛んでいく」の百年

もう年を越してしまっただが、昨年2013年は、かの有名な「コンドルは飛んでいく(El Condor Pasa)」生誕100周年の年であった。もちろんそれ故、ペルーでは関連イベントなどがいろいろ開催されたりしてそれなりに盛り上がった。1970年にサイモン&ガーファンクルが新たに英語の歌詞を書き下ろして歌ったカバーが世界的にヒットし、以後アンデス音楽の象徴として愛され続けている名曲であるが、意外にこの曲の背景などについては知られていない。今回は、この「コンドルは飛んでいく」にまつわる四方山話をしてみたいと思う。

「コンドルは飛んでいく」が誕生した1913年のペルーは、1880年代にチリと戦い手酷く負けた「太平洋戦争」の痛みもようやく癒えてきた時代であり、戦中に絶好の機会とばかりに各地で反乱を起こした先住民を今後どう統治していくかが大きな社会問題となっていた時代でもあった。そのこともあって19世紀末より先住民をきちんとペルー人として国民化していかなければならないという議論が巻き起こり、先住民文化再評価運動とも言えるインテリ層による「インディヘニスマ」と呼ばれる動きが活発化しつつあった。また、社会的にも先住民（というよりも実は「インカ」イメージ）を許容できる余裕が生まれつつあった時代とも言える。

そんな中、1913年12月19日にリマのマッシ劇場で封切られたのが、サルスエラ「コンドルは飛んでいく」である。サルスエラとはスペイン生まれの軽歌劇で、当時ラテンアメリカ世界では新旧大陸の最新文化をやりとりする手段として非常に重要な位置を占めていた舞台芸術だ。リマを代表する音楽であるバルスやポルカもサルスエラを通じて19世紀半ばにペルーに持ち込まれるなど、最新の音楽文化もサルスエラを通じて入ってきたし、ペルー発の舞踊サマクエカもサルスエラの劇を通してスペインに伝わったとされる。このように、時代の最先端を走るメディアであったサルスエラやオペラなどの歌劇で、1900年よりインカをテーマにした作品が作られるようになってきた。その中でもっとも大成功したのが、フリオ・デ・ラ・パス脚本、ダニエル・アロミア・ロブレス作曲の「コンドルは飛んでいく」だ

った。しかし、「コンドル〜」の公演はリマのマッシ劇場で封切られて大ヒットして市立劇場に進出するも、翌1914年にオスカル・ベナビエデス大佐による軍事クーデターで打ち切りとなってしまふ。この時代の逆境にもかかわらず、この作品の評判はとどまることを知らず、1916年にはクスコで初演されるなど、各地の劇団と音楽家たちがこの舞台をそれぞれ上演し始めた結果、ペルー全土で5年間で3000公演といわれる歴史的な大ヒット作となったのだ。

では、それほどペルー国民を魅了したサルスエラ「コンドルは飛んでいく」とはどのような物語であったのか。意外にもその内容は非常に時事的・政治的で、実際のペルーの社会状況や1911年に実際に起こった深刻な鉱山事故とその後の社会の反発に発想を得た作品であった。ペルーの中部アンデスに位置するセロ・デ・パスコ県が作品の舞台となっており、そこに住むアンデス先住民たちと、アメリカ人鉱山主との社会闘争がテーマとなっている。当時のペルーは、19世紀初めにスペインの経済的統制を嫌って独立したにも関わらず、再び英国や米国などによる経済支配が徐々に強化されつつあった。そのためペルー経済が欧米列強の新たな帝国主義に飲み込まれる危機感から、にわかにアンチ米国、アンチ英国内的な国民感情も芽生えてきつつあった。それが先住民の国民化とインカの子孫たる彼らの文化の再評価という新たな潮流と重ね合わされたことで、大きなヒットへとつながったのではないだろうか。

脚本を書いたフリオ・デ・ラ・パスは、本名をフリオ・バウドウィンというリマ出身の文筆家であった。彼は若くしてブエノスアイレスへと渡ってジャーナリストとして活動し、フリオ・デ・ラ・パスのペンネームで先住民の権利に関するエッセイを書いたりもしていたようで、当時まだ萌芽の端緒であったインディヘニスマに早くから薫陶された青年であった。リマに戻った後「コンドルは飛んでいく」で成功するも、わずか35歳で夭折してしまふ。

また、我々にとってより馴染みが深い音楽を作ったダニエル・アロミア・ロブレスは、ペルーアンデスの東側、アマゾンへと下ったワヌコ県に1871年に生まれ、12歳の時リマへと勉強のために出てき

た。リマでは医学を学びながら音楽にも傾倒し、アマゾンやアンデスに入って薬草の研究をする中、次第に先住民音楽などの採集に力を注ぐようになっていった。また当時はアンデス音楽研究が始まった時代でもあり、アンデス先住民音楽が五音音階で構成されているなどの研究成果が世に出始めた時代でもあった。このような最新の研究と自らの収集したコレクションをもとに、彼は1913年に「コンドルは飛んでいく」の大ヒットを生み出すことになるのである。その後の彼はニューヨークに移住し、晩年は再びペルーに戻って1942年に71歳で亡くなった。サルスエラ「コンドルは飛んでいく」の他にも多数のオペラや交響詩、ピアノ曲などを作曲している。

「コンドル〜」が生み出された20世紀初頭は、インカをテーマにした楽曲が数多くインテリ音楽家たちによって生み出された「インカ音楽」の時代だ。1900年にはオペラ「オリヤンタ」、1906年には「アタワルパ」が封切られている。また、日本でも「folklore」は流行し始めた頃に愛された「太陽の乙女たち」や「平原と高地」「インディオが泣く時」「ハチドリ」などもこの時代を代表する作品だ。ロブレス以降も、プーノ出身の作曲家テオドロ・バルカルセルが、ペルーを代表するインカ音楽作曲家として高い評価を受けて活躍した。こうした「インカ音楽」の流れは、やがて「インカ音楽コンテスト」の流行へ、そして各地のfolklore風音楽の流行と新たなアンデス音楽スタイルの確立へと大きく舵を切っていくことになる。その辺りは話が逸れるのでまた機会を改めて書きたいと思う。

さて、冒頭にも記したように「コンドルは飛んでいく」が再び世界的に知られるようになったのが、1970年のサイモン&ガーファングルの新しい英語の歌詞によるカバーである。これは、フランスでのステージの対バン相手だったというロス・インカスの演奏する「コンドル〜」に魅せられ、頼み込んで彼らの演奏をバックに歌ったものが世界的にヒットしたものだ。結果的にヤンキー・ゴーホーム的な軽歌劇のテーマ曲を、ヤンキー自身がカバーして世に知

らしめるといふ皮肉なことになってしまったが、この時代になると曲自体は残っていても物語まで認知はされていないようだった。

そして繰り返しになるが、昨年2013年は、「コン

ドルは飛んでいく」が生まれてちょうど100年にあたる年だった。リマでは、この100周年を記念して、サルスエラ「コンドルは飛んでいく」が再演された。マルティナ・ポルトカレーロとレイナルド・アレナスという二人の歌手の共演で、11月14日から16日の3日間、国立工科大学(UNI)劇場での再演で



あった。これまで脚本でしか読めなかった「コンドル〜」が、今回の再演により実際に役者たちの迫真の演技や音楽とともについに見ることが出来るようになったのである。実際に作品を見てみると、「コンドル〜」で有名な3部構成のそれぞれのメロディは、分割され主に間奏曲としてバラバラに使用されている。つまり、今「コンドル〜」として演奏されているスタイルも、このサルスエラのダイジェスト再構築版だったということが今回初めて知った大きな発見だった。また基本的に全てクラシックの管弦楽編成で演奏されている。ケーナはもとよりギターもアルパも登場しない。その意味でも純粋にサルスエラのアンデス演目であったということがよく分かる。とは言え、ロブレスの代表作であるこの「コンドル〜」、なかなかよい曲がたくさん収録されているので、ぜひ機会があれば聴いてみて欲しい。

ちなみに、「コンドルは飛んでいく」がアンデス音楽イメージを象徴する存在となったことにより、その「元曲」の起源論争がペルー、ボリビア、チリで行われている。それぞれの国がおらが国の曲が元曲だと言い、「コンドル〜」を自国の音楽だと主張しようとしたりしているのは面白い。ちなみに、ペルーで元曲とされている代表的な例は、1925年にフランス人の音楽学者夫妻が発表した『インカ音楽とその生き残り』に収録されているフニン県ハウハの歌曲だ。こうした元曲探しもいろんな想像力が掻き立てられて面白い。ちょっとマニアックに楽しみたい方はそういう楽しみ方もあるので、ぜひ挑戦してみたい。 (水口良樹)

ミゲル先生のメキシコ食巡り トウモロコシのスープ

Sopa de Elote

読者のみなさん、2014年もまた、ソマリサのレシピでおいしいメキシコ料理を楽しんでいただけたらと思います。今回は、トウモロコシベースの、メキシコで最も古くから伝わるスープのひとつをつくってみます。

まず、スープの名前の意味を理解するため、ちょっとだけメキシコの歴史にふれたいと思います。

コーンはスペイン語ではmaízと言いますが、今回のスープの名は「Maízのスープ」ではなく「Eloteのスープ」です。

Eloteという単語は、メキシコ盆地のアステカ人たちが使ったナワトル語を起源にしています。ナワトル語では"elod"でしたが、スペイン語になって発音が変わりeloteとなり、メキシコ全域や中米はもちろん、米国に住むメキシコ人や中米人コミュニティでも使われています。

eloteは、トウモロコシのやわらかい穂軸を意味し、英語は“corn cob”です。成熟していてもそうでなくても、地面に生えているトウモロコシの実の穂軸を指しますが、収穫されたばかりで、粒がまだしめっていてやわらかいものもeloteと呼びます。粒を取り除いた中心部分はナワトル語で“olote”といい、「心臓」を意味します。

メキシコには「愚か者の少ないところにはeloteが



増える」という、とても古いことわざがあります。分配すべき人が少なければ一人あたりの分け前は増える、という意味です。

メキシコや米国南部では、eloteはきわめてありふれた食材で、塩でゆでて、マヨネーズやバター、マーガリン、チーズ、クリームチーズ、レモン、粉末唐辛子などさまざまな調味料をつけて食べます。

水だけでゆでて、利尿作用のある茶として飲むと腎臓病によいとされています。

メキシコではどこでもトウモロコシだけを扱う専門の売り子がいます。ユカタンでは彼らのことを“elotes”と呼びますが、マヤ語ではeloteのことを“nal”と言います。

子どものころ、家でゆでたトウモロコシや、屋台で買ったトウモロコシを食べながらテレビを見ていたものです。学校の近くには露店もあり、私たち学生はゆでトウモロコシが大好きでした。

■材料 4人分

- ・熟した生トウモロコシ 1本
生のトウモロコシが入手できなければ真空パックのゆでトウモロコシを使ってもよい。
- ・ニンジン中 1本
- ・セロリ 1本
- ・トマト 大1個か中2個
- ・タマネギのみじん切り 大さじ4杯
- ・コリアンダーのみじん切り 大さじ2杯
- ・塩とコショウ

■作り方

- 1) トウモロコシの皮をむいてヒゲをとりのぞき、1人あたり2〜3切れになるように輪切りにする。

- 2) ニンジンの皮をむき、1センチ角に切る。
- 3) タマネギをみじん切りにする。
- 4) トマトを細かく刻む。
- 5) コリアンダーをみじん切りにする。
- 6) セロリの葉を取り除いて洗い、筋をとったあと、1センチ角ぐらいに切る。
- 7) 浅めの鍋に4人分の水を入れ、沸騰し始めたらトウモロコシとニンジンとトマト、セロリ、タマネギを加えて、塩コショウで味をととのえる。15分ほど強火にかけたあと火を弱め、足りなければ水を加え、すべての具に火が通るまで火にかけつづける。
- 8) 深い皿かスープカップによそい、コリアンダーのみじん切りをトッピングする。お好みでクリームチーズや、ハラペーニョのみじん切りをのせてもよい。

ミゲル・アクーニャさんの「メリダ・スペイン語英語教室」では2月からメキシコ料理教室を始めます。いずれかの日曜日を予定。<http://www.geocities.jp/yucateco1956/>

ラテンアメリカ 治安とその経済的成本

国連開発計画（PNUD）によれば、ラテンアメリカは世界で最も不平等で、暴力が深刻である。ここ10年間で年平均4.2%の経済成長があるにもかかわらず犯罪が増えており、10年間で100万人以上が殺害されている。3人に1人が暴力犯罪の犠牲者になっている。犯罪が起こる要因には、教育水準が低く失業率が高いこと、司法制度が機能していないことなどがある。治安の悪化は経済発展にも影響を及ぼし、殺人による高い死亡率がなければ、国内総生産（GDP）は0.5%上昇していたと推定される。2009年1年では24億ドル以上に相当するという。また安全のために個人が支払わなければならない額はコスタリカで国内総生産の2.5%、ホンジュラスでは10%以上にのぼると見られている。PUNDによれば2011年、メキシコで小学校を終えていない18歳から40歳までの男性が殺される率は10万人あたり300人であるのに対して、大学を終えている26歳から40歳までの男性が殺される率は10万人あたり26人である。また欧米での消費向けに大量の麻薬が密輸されているが、そのルートになっている地域の多くで組織犯罪が多発している。この問題の解決には、青少年たちが犯罪に陥らないよう教育に力を入れること、暴力を予防するために、武器や麻薬、アルコールの市場をしっかりと管理すること、効果的な犯罪対策のシステム化、裁判の民主化などが必要だ。（BBCMUNDO/2012/12/23より）

メキシコ NAFTA発効から20年

サパティスタ民族解放軍蜂起のきっかけとなった北米自由貿易協定（NAFTA）が締結されてから20年がたった。NAFTAにより補助金を受けた安い穀物が米国から流入し、メキシコの農業は大きな打撃をうけた。作物の買い取り価格は生産コストより安くなり（フリホル豆は1キロを生産するために12ペソかかるが、買い取り価格は7ペソ。トウモロコシは1ヘクタールあたり12,000～20,000ペソかかるが、1トンの買い取り価格は2,700～2,900ペソ。）、200万人が離農を余儀なくされ、農村部から都市部、米国へと出て行った。その結果、農村部では人口、特に成年男性の数が急減し、女性と子ども、老人だけになり、コミュニティの組織が維持できなくなっているという問題も起こっている。牧畜業も崩壊の危機に直面している。牧場は30%減少し、価格上昇のため牛肉の消費量は減り続けている。酪農家の状況も破滅的だ。牛乳及び乳清などの乳製品の輸入規制の欠如と価格低迷で60万以上の生産組合と70万近い小規模生産者が廃業している。大豆の95%、米の60%、小麦の49%、トウモロコシの25%、牛乳の32%は輸入にたよっている。貿易額自体は増えているが、3年を除いて赤字となっている。過去5年の貿易赤字は47億9200万ドルにのぼる。安い穀物が入って基本食料は安くなるはずであったが、輸入価格は安くても輸入業者・仲買業者が利益をむさぼり、小売価格は安くならなかった。それどころか、穀物価格の値上がりなどもあって2005年から11年までの間で基本食品の値段は53%上昇している。貧富の差は拡大し、国全体では定職につけずインフォーマルセクターで生計を立てる人が人口の57%にのぼる。（La Jornada 2013/11/11, 2014/1/2, 2014/1/4より）

ドミニカ共和国 水位が上がり続けるカリブ最大の湖

ドミニカ共和国のエンリキージョ湖はカリブ地域最大の湖。塩水湖で海拔マイナス40メートル。このエンリキージョ湖がここ10年水位が上がり続けている。2003年に165平方kmあった面積は2013年には350平方kmにまで増えた。これほどの速度で水位があがるのはこれまでになかったことで、一帯の降水量が増えた事などが原因。湖の回りの集落や道路が水没し、住民は移住を余儀なくされている。また、すぐ近くにあるハイチ側のアズエイ湖も同様に水位が上がっており、2003年に114km²だったのが2013年には140km²になっている。この二つの湖の間の距離は10年前は10キロだったのが現在は5キロになっている。このままいけば、やがてこの二つはつながり、生態系にも影響を与えると危惧されている。（BBC Mundo 2014/1/16より）

2014年になりました。今年最初の「そんりさ」147号はメキシコ特集です。サパティスタ蜂起20周年で、自治地域の様子を柴田大輔さんがビビッドに伝えてくれます。蜂起のきっかけは北米自由貿易協定NAFTAでしたが、これを調印したサリーナス大統領（当時）は「これでメキシコは第一世界の仲間入りをすると宣言しました。が、メキシコは第一世界どころか、農業が破壊され、貧富格差はさらに増大し、組織犯罪が跋扈するますます暴力的な社会「失敗国家・破綻国家」となっている状況も紹介されました（山本昭代さんの翻訳）。

今後も多様なラテンアメリカ社会について紹介していきたいと思っています。今年は「ラテンアメリカとアフリカ系の人びと」というテーマで新しい翻訳シリーズも開始する予定です。連載記事とともにどうぞご期待ください。（新川志保子）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、
 発送は京都で 月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|------------------------|------------------------|
| Vol.146 グアテマラ視察報告 | Vol.142 サパティスタの新しいサイクル |
| Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今 | Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪 |
| Vol.144 ブラジル・家族農業の危機 | Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力 |
| Vol.143 グアテマラ・ジェノサイド裁判 | Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
 TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・
 FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

67万0684円

<グアテマラ基金>

90万4483円

(2014年1月現在)